



学園花の村機関紙第 7 号

2013年12月3日(火)

編集兼発行人 松井道夫

掛川市掛川1065

TEL (0537) 24-0101

FAX 24-0242

Y-F#

mnm317@kokai.or.jp

文明を得て文化を失うな

— 小農の復権で「清貧の思想」

を育てよう —

津野 幸人

いま、超党派の国会議員がカジノ（賭博場）を適法化するための議員立法を検討中だ。さらに雇用創出と税収増を目指して20以上の都市が設置に意欲を持っている。なぜカジノが違法であったのか。その意味を熟慮してみよう。賭博は金銭感覚を麻痺させる。額に汗して勤労で稼ぐ金と、僥倖や偶然を当てにした射倖で得る金とは、人心に与える影響が全く異なる。前者は勤勉心を養い後者はそれを破壊する。

しかしながらアメリカ生まれのマネーゲームもその投機性においてはカジノと同格だ。これが現代資本主義の到達点だろうか。資本主義の台頭期には、「富は徳に至る手段」（アダム・スミス）という高邁な精神があった。やがて、資本主義は工業の発達を促して、物質文明を生んだ。が、この文明を支える価値観は、既成の良

質な伝統文化を損なう恐れがある。

いち早くこれに気付いた明治の文人たちは、輸入された西欧文明—物質文明と拝金思想—を批判して澆季文明と呼んだ。澆季（ぎょうき）とは、道德衰え、人情希薄となった末世の意だ。

いま世界を支配しつつあるのは西欧に起源を發してアメリカで完成された文明である。

文明と文化とはその性格が違う。文明は人間の知性が物質的に具体化されたもので、拡散伝播する性質を持つ。一方、文化は知性が一極に濃縮して徳義を向上させる。このレベルに達しないのは未成熟の途上文化だ。文明と文化は相補的ではなくて、「文明を得て文化を失う」場合が多い。（拙著・小さい農業、農文協・p90）。

アメリカ合衆国はヨーロッパからの移民によって建国された。その初期移民は北欧系の勤勉で禁欲的なプロテスタント（新教徒）であって、新大陸で農業を展開し、逞しい開拓精神と自主独立の風風を培った。

南北戦争（1861〜65）の頃からアメリカのエートス（職業人の倫理）は変容した。それは多数のカトリック教徒が新しく移民してき

たことと関連する。新移民はイタリア南部とシチリア出身も含まれるが、圧倒的多数を占めたのは、アイルランドの貧農だ。主食であるジャガイモの凶作（1845〜49）で人口の二割が餓死し、二割が国外へ脱出したという。

彼らは農業を望んだが、それはすでに先発プロテスタントで固められていた。余儀なく東部の新興工業都市で活路を探す。都市で生きるためには、貨幣が絶対に必要で、これがなければ死んだのと同然だ。このために、金が金を産むマネーゲームが発達する。極限までに貨幣を追求するのがアメリカン・ドリームである。だが、此の夢は一握りの勝者と大多数の敗北者を生む。私はカジノが禁止されているアーカンソウ州の農家で、稲作期間の五年を暮らした。プロテスタント農民は、教会での神への祈りを中心にした禁欲的（禁酒・禁煙）で、開拓時代の質朴な生き方を守っているのに驚嘆した。同時に、消費文明から伝統文化を守る武器は経済力であることを、アメリカの清教徒から学んだ。ヨーロッパにおいても、経済的に成熟した国では、小さな農業が市民の娯楽となっている。わが国もその段階に達した。市民が土地を耕して、経済を超えた新しい価値観を育てよう。我々には「清貧の思想」という伝統文化がある。文化は、それを誇りとする人と共に光芒を放つ。